

「^お上山^し城^ろ」からのたより 初夏・第74便

上山の新収蔵資料より

「山形縣下眼鏡橋之真景」

この錦絵は明治十四年六月三日に長谷川竹葉が描いた常磐橋である（発行元五十嵐太右衛門）。この常磐橋は山形市桜田地内、現在の坂巻橋付近に明治十一年に架けられた石橋で、当時、土木県令といわれた三島通庸により近代化政策の一環として建造されたものである。上山市内には同時期に造られた堅磐橋（川口）、中山橋（中山）、硯橋、新橋（橋下）の4基が現存している。

錦絵の解説によれば、橋の長さ一九二尺、幅



山形縣下眼鏡橋之真景

二四尺、橋下には五つの半円形があり、通称眼鏡橋と言われている、とある。橋側には水天宮が祭られ、春には吉原村はあたり一面桃林で、西南の方向には上の山驛が見える」とあり、よく見ると橋の奥にいくつかの建造物が並ぶ上山の様子がうかがえる。水天宮の場所は現在地の対岸に描かれているようだ。英国人旅行者のイザベラ・バードは、この橋の完成間際に近くを通り、技師の奥野仲蔵から設計図をもとに説明を受けたと、後に『日本奥地紀行』に記している。

残念ながら、この石橋は明治二十三年の洪水で流され、その姿はこの錦絵や写真でしか見ることができない。水天宮には「常磐橋記」という記念碑が二つ建っているが、その一つは橋と共に洪水で流され、昭和四十一年に河原で発見されたものである。

この錦絵自体が希少で、明治十四年当時の常磐橋の壮麗な姿と羽州街道の様子をうかがうことができる貴重な資料となっている。

公益財団法人上山城郷土資料館

学芸員 大場 浩子

【常設展示室より】この資料は2階第3展示室で公開しています。（平成二十七年八月末まで）